

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

| | |
|---|---|
| 共通教育センター会議 | |
| (責任者名) 木村貴彦 | (役職名) 共通教育センター長 |

② 自己点検・評価体制における意見等

| 自己点検・評価の視点 | 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 |
|---|--|
| 学内からの視点 | |
| プログラムの履修・修得状況 | 本プログラムの必修科目「データサイエンス入門」と「情報処理学Ⅰ」(保健医療学部)、「情報処理学Ⅱ」(保健医療学部以外)は、全学共通の基礎分野の卒業必修科目であるため、全ての学生が履修している。また、修得状況については共通教育センターが把握できる体制にある。 |
| 学修成果 | 本プログラムの必修科目「データサイエンス入門」と「情報処理学Ⅰ」(保健医療学部)、「情報処理学Ⅱ」(保健医療学部以外)の成績は、共通教育センター会議で確認し、学修成果を判断する体制を取っている。令和6年度に単位修得率が低かった科目について、令和7年度は、「データサイエンス入門」は秀と優の合計が約48%(R6:44%)であるのに対して、不合格が約16%(R6:23%)にとどまり、「情報処理学Ⅱ」は秀と優の合計約43%(R6:44%)いる一方で、不合格者が約18%(R6:26%)にとどまるなど若干の改善が見られた。今年度は課題提出など規則的な学修に対する指導を行った成果ではあるが、一方でデータ操作の修得に困難を抱えている学生が一定数存在している状況に大きな変化はない。データ操作の修得に困難を抱えている学生に対して、令和5年度までは情報実習室の管理員による時間外学習のサポートがあり、それを補うべく令和6年度より授業時間外の既修の上級生による学修サポーターによる相談会の充実を図り、令和7年度には一部授業にSAとしてサポートに入る取り組みを行ったが、十分な成果を挙げているとは言い難い。令和8年度は学修サポーターの活動をさらに活発化していく予定である。なお、令和7年度卒業生に対して実施したアンケートでは、数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能が身に付いたかどうかという設問に対して、全体的に肯定的評価(身に付いた・ある程度身に付いた)が計49%、否定的評価(あまり身に付いていない・身に付いていない)が計51%とほぼ拮抗していた。改善策として、各専門領域に応じた実践的なデータサイエンス教育の導入や専門科目と連携した統合的な学びの場を設けることで、知識・技能の定着向上が期待される。 |
| 学生アンケート等を通じた学生の理解度 | 「データサイエンス入門」の受講者にアンケートを実施し、当該授業やプログラム全体の理解度を確認した。「受講を通じてデータやAIの社会での役割について理解が深まったか」の質問に対し、「わかるようになった」と回答した学生が93.9%(R6は89.8%)で、「どちらとも言えない」が5.8%(R6:9.3%)、「わからなかった」が0.4%(R6:1.9%)であった。また「この科目の受講を通じて、自分自身が将来データやAIを活用していけるようになったと思うか」の質問に対し、「そう思う」と回答した学生が77.6%(R6:70.2%)で、「どちらとも言えない」が19.5%(R6:22.6%)、「そう思わない」が2.9%(R6:7.2%)であった。内容の理解度、利活用力共に昨年度と比べて向上しているが、利活用力はまだまだ向上させる余地があり、さらなる改善が望ましい。 |
| 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度 | 「データサイエンス入門」の受講生に対するアンケートにおいて、後輩学生等への推奨について確認している。「面白いし、ためになるから熱心に受講しよう」を10、「卒業必修だから受講しないといけない」を1として10段階で評定してもらった。その結果、平均は5.95(R5:5.67)であった。内訳をみると、1～3が13.0%(R6:16.6%)、4～7が61.7%(R6:(64.5%)、8～10が25.3%(R6:18.9%)であった。また最頻値は昨年度同様5点であった。推奨度は微増しているといえる。こうしたアンケートの結果を基幹科目である「データサイエンス入門」の担当教員と共有し、学生からの推奨度の向上を図っていく。 |
| 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況 | 本プログラムの必修科目「データサイエンス入門」と「情報処理学Ⅰ」(保健医療学部)、「情報処理学Ⅱ」(保健医療学部以外)は、全学共通の基礎分野の卒業必修科目であるため、全ての学生が履修している。共通教育センター会議のデータサイエンス部門では、全学および各学部学科における数理・データサイエンス・AI教育の内容について各専門分野からの観点も取り入れ見直し等を行っている。なお、令和5年度より新入生オリエンテーション時に本プログラムの目的と意義を説明している。また、令和5年度よりシラバスにデータサイエンス教育プログラムの対象科目であることを明記するなどして、学生の選択科目の履修を推進している。 |
| 学外からの視点 | |
| 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価 | 本プログラムは令和4年度に開始しているため、令和8年3月に初年度の修了者を輩出したばかりであり、修了者に対する評価は行えていない。卒業後1年半後を目途に、卒業生とその就職先を対象に毎年「卒業生・事業所アンケート」を実施しており、卒業生の進路先や活躍状況、企業等の評価を把握する仕組みを設けている。 |
| 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見 | 就職先も対象にした「卒業生・事業所アンケート」にて、本プログラムの内容・手法等について意見を聴取した。令和7年8月～9月に実施したアンケートでは、本学のデータサイエンス教育が適切であると感じるかどうかについて5段階で尋ねたところ、258件の有効回答に対して「適切」「どちらかといえば適切」という回答が82.2%に上った。「どちらかといえば適切ではない」という回答も2件あり、それらの産業界の視点も踏まえて、共通教育センター会議データサイエンス部門にてカリキュラムの見直し・改善等行う。 |
| 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること | 「データサイエンス入門」の初回に、それぞれの学科で目指す資格を活かした職業に就いた際に、データサイエンスやAIがどのような役割を果たしているか、各学部(学科)の教員から紹介してもらい、「学ぶことの意義」について理解を深めている。また、授業中のワークや毎回の課題で、「自らの将来」との関連を考えさせるようにしている。 |
| 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること | 授業で紹介するデータやAIの活用事例は、なるべく学生の身近な内容を取り上げ、また授業中のワークにも学生に身近なテーマを採用することで、学生がとらえやすい授業内容にしている。 |